

「……………」

目が覚める。自分という個を認識する。

身を起こし、確かめるように両手を握って開いて、ぐるりと一度首を回す。

窓の無い暗闇に塗れた部屋。開いた視界には何も映らなくとも、感覚だけで全てが見える。

石の壁。古びた天井。いつだったか人間の真似事をして置いた家具。目覚めた自分が収められていたモノ。

何も変わらない。変わるはずがない。むしろ変わっていたら大変だよ。私の館が泥棒に入られただなんて、向こう百年は笑われそう。

「頭もちゃんと覚めてる……かな？」

確かめるように出した声は、すぐに暗闇に消えてしまう。

まるで時が止まったかのようにも思えるそんな静寂。そのままだと自分の呼吸すら五月蠅く感じてしまいそうだったので、少し大げさにモノから飛び出て、素足で石の床をペチペチと鳴らす。

そうして部屋の中央へ。立ち止まるとすぐにザザ、とノイズのような音と共に暗闇より尚濃い影が身体を包み、やがて服の形へと成っていく。

「うん、完璧♪」

シンプルなフリルのブラウスとスカート。さすがに色までは暗闇の中だと解らないけど、白と黒？ これなら流行りがどれだけ変わっていても、浮いたりほしくないでしょう。ダメならその時替えればいいだけだしね。

そうして部屋を出ようとして「あれ？」足の裏に石の冷たさを感じて、靴まで創っていない事に気付いた。

「これでよし、と」

改めて靴を創って、部屋を出る。

眠っていた地下室から階段を上がって一階へ。

絨毯が敷かれた廊下は地下と同じように暗闇に包まれていて、それを作り出している分厚いカーテンにそつと手をかけた。

「おっと」

ほんの少しでいい。僅かにでも星の光があれば服の色も確認出来ると思ったのだけど、開いたカーテンの隙間から差し込んできたのは星とは比べものにならない程眩しいもので、その光を浴びた手が一瞬で燃え上がり、そのまま灰になって廊下に落ちてしまった。

「私が起きたくらいだからもうすつかり夜だと思ってたけど、早起きしすぎたかな……？」

支えるものが無くなったカーテンがふわりと戻って、再び廊下を暗闇で包み込む。すると落

ちた灰は溶けるように服を削ったのと同じ影へと変わり、手首へと集まって骨へ、肉へ、肌へ、爪へと成っていく。

すらりと伸びる指先まで元通りになるのに僅か数秒。綻びがないか確かめてから、もう一度分厚いカーテンの向こう側へと視線を向けた。

「贈り物が届くのは夜だろうし、それまでただじっと待つ、というのもねえ？」

そつとカーテンに触れる。太陽の光を目一杯に受けた分厚い生地はほんのりと熱を帯びていて、ただそれだけで触れた指先がチリチリと焦がされていくようだった。

——うーん。

考え込む。とはいえそれは大したことでもなくて、ただ「贈り物」が届くまでの時間をどうするか。ようはただの暇つぶしの算段。

けれど、いくら考えたところでそうそう妙案は浮かんでこない。

それもそのはずで、起きている時間は僅か数日、寝ている時間は数十年なんて生活が続けば、暇な時に何をしていたかだなんて思い出せるはずもない。

こんな生活になる前、それこそ我が物顔で夜の世界を飛び回っていた頃ならいざ知らず。数少ない顔見知り数十年前——私にとっては昨日だけど——と同じ場所にいるとも限らないし。

「そういえば、一人だけいたつけ。ずっと同じ場所にいなうのが」

懐かしい顔を思い出して、そうなることじっとしている時間が勿体なく感じて足が自然と玄關

へと向かう。

館といつてもそんなに大きいものでもない。二部屋分廊下を歩けば、すぐに小さな玄関ホールに辿り着く。吹き抜けになつている空間は地下室から廊下までと比べれば籠もつた感じは幾分和らいだけど、やっぱり数十年分の停滞は同じようにあるみたいだった。空気とか、積もつた埃とか。

——今回もご飯の前に掃除してもらわないとダメだね。

一通り見渡してから、扉を開く前に影を操つて日傘を創る。生身のままでは外に出た瞬間に全身灰になつてしまうので、これはその防衛手段。見た目はただの日傘でも、ちゃんと全身をカバーしてくれるから問題ない。

いつだったか同族の知り合いに貰つたものだけど、その知り合いも友人の魔女から貰つたとか言つていた気がする。生きていく上で便利な道具が作られていくというのは、人の世界も私たちの世界もそう変わらない。

「さて」

扉を開くと、やっぱり早起きをすぎたようで、まだ西の空が朱くなり始めた頃だった。

館の周りを囲む森。煩わしい、とは言わないけど、西日に朱く染まる木々を見てみると早く爆発しないかな、なんてことまで思つてしまう。

そのまま眺めていると本当に太陽を爆発させにいつてしまひそうだったので、近くの木の下の

まで歩いていって、全身が木の影に入っているのを確認してから日傘を閉じた。

目的の場所までは人の足なら歩いて二日か三日か。勿論そんな悠長な事はしてられないし、するつもりもない。夢を見て目が覚めた時点で、既に歯車は回り始めている。贈り物は夜にも届けられる。そういう契約で、そういう仕組みなのだから。

私を縛る、茨の枷。

「そういえば……夢の中で誰かの声を聞いたような？」

目覚める前にいつも見る夢。夢というよりかは、目覚める私にその役目を忘れないようにさせるための、言うなれば洗脳みたいなもの。それだけのものだから、誰かの声が聞こえるなんて事は今までに一度もなかったはずなのに。

聞き間違えか、それともあるいは。

「まあ、なんでもいいんだけど」

どうせ仕事が終わればまた眠るだけ。何かを気にしたところで、やれる事もやるべき事も何一つ変わらない。

それこそ考えても仕方のない事だと、私は自分の足下に広がる影の中へと溶けていく。沈んでいく。

影の中——という表現が正しいのかは解らない。

どんなものにも表があれば裏がある。昼と夜。光と闇。この世界そのものという大枠であっ

てもそれは同じ事。

表の世界。裏の世界。

その二つの境界線こそが影であり、また二つの世界を繋ぐ扉でもある。

つまりどういう事かといえば——

「うん、これだけは本当に便利だよね♪」

建物と建物の間の細い路地。昼間であっても日の届かないようなその場所で、私はそろりと影から身を出した。

人の足では二日か三日という距離も、私にとつては無いに等しい。もつとも、これ以上の距離となるとさすがにもう少し裏側を潜っていかないとダメなのだけど。

「さて、魔女様はまだこの街にいるのかな？」

日傘を差して、路地を出て大通りへと。

ある程度の目星を付けて出てきたとはいえ、自分の記憶にあるのは前回——数十年前の記憶でしかない。街並み全てが変わっていれば、その時点で迷える子羊になってしまうのだけど、どうやらそれは杞憂みただった。

「案外変わらないものだねえ」

建物も、車も、人も、全てが見た事がないものになっている。それでもそれらが建ち、走り、歩く道は、見た目こそ変わってもその行く先は昔のまま。

私はすっかり変わってしまった景色の中を、覚えていた通りの道順で歩いていく。

男の人も女の人も、それこそ老若男女問わず向けられる視線を軽く流して、大通りから裏道へ。そして更に細い道へ。細い道へ。

どうやらここは本当に何も変わっていないようで、大きな街中だというのにまるで迷路のように入り組んでいる。

地元の住人ですら迷ってしまいそうな小径。おまけに簡単なものとはいえ結果まで張つてあるものだから、普通の人間では精々元の大通りに戻されるか、迷つたまま出られなくなるか。まあそもそも、存在自体に気付かない方が多いかな？

でも逆にいえば、こんな結界があるという事は彼女がまだここにいるという証拠でもある。そうして何度か曲がつた末に辿り着いた場所。小さな家の古びた扉を、私はノックもせずに関いた。

「これはこれは姫様、お待ちしておりましたのですじゃ」

中へ一步入ると、奥から老婆の声が聞こえてきた。

いかにもな感じのしわがれた声と、いかにもな感じの喋り方。

「私の事を覗くのはやめてって言つてたよね？」

言いながら勝手に古びた椅子に足を組んで座ると、今にも崩れてしまいそうな音を立てた。同じようにアンティークとも言えないただただ古いテーブル。何に使うのかも解らない怪し

いモノが並ぶ棚。

時間が止まったような私の館とはまた違う、言うなれば時間に置いていかれたような家の中。テーブルを挟んで反対側に座る老婆——もとい魔女が「ふあふあふあ」と枯れた植物みたいな声で笑った。

「これは異な事を。姫様ほどの御方であれば、たとえ遠く離れていようとも、そのお姿はこの老いぼれの目にもはっきりと見えますからな」

「私が目覚めた時から見ていた、と？」

「いかにも」

やましい事など何もしていない、というように魔女が深く頷いた。

「ふうん……ま、別にいいけどね」

このいかにもな見た目をした魔女は、日頃から怪しい薬を作ったり怪しい魔法を作ったり怪しい儀式をしたりと、本当にいかにもといった感じの魔女なのだけど、一つだけ魔女っぽくない、占い師みたいな事をする。

人の内側、あるいは裏側。そこを覗く事で相手の過去から現在、未来までもが解るのだとか。先の事が解ってしまったら面白くない、なんてよくありそうな理由で私に対してその力を使う事を禁止したのは、果たしてどれほど前だったか、もう覚えていないけど。

だって、面白くないでしょ？

「しかし姫様はお変わりないようで、安心しましたのですじゃ」

深い皺に覆われた顔。見えているのかも解らない目。そんな魔女が枯れ木のように細い指先をついと宙に滑らせると、隣のキッチンからふよふよとポットとカップが浮いてきた。そうしてテーブルの上までまるで来ると、まるでそれ自体が意志を持つているかのようにひとりでポットの中身をカップへと注いで、ポットはテーブルの中央、カップは私の前へと静かに着地する。

ここに来たら毎度の事なので別に驚きもしないけど、見るたびに便利そうだな、とは思う。

——私は出来ないんだよね、こういうの。

「変わるものにも、寝て起きて寝るだけの生活だもの。変わりようがないと思わない？」

つまらなさそうに——実際つまらない——私が言うと、魔女はまた「ふあふあふあ」と笑う。

「少しはこの老いばれの言葉に耳を傾けてくださる気になりましたかな？」

「む……」

今もまだ私を縛る古い契約。茨の枷。

思い出すと胸の辺りがむずむずしてくる。刺されたからかな、ぐっさり。

「しかし、今にして思えば姫様がそうだったのは逆によかったのかもしれないですじゃ」

「よかった事なんて何もないけど」

「ふあふあふあ。姫様にとってはそうかもしれないませんが、今となっては我々のようなモノも数

を減らし、まともな『名』を持つのははや姫様が最後まで言ってもよいでございましょう」

「……そうなの？」

いかにも、とまた魔女が深く頷く。

表と裏。人間と私たち。

確かに遙か昔に比べれば、人の世も随分と様変わりしたように思う。文明、とりわけ科学の発達によって夜の闇を克服するようになったのはこの百年か二百年かといったところだったはずだけど、それでもまだこちら側に影響が出るほどではなかったように思う。

「前回姫様がお眠りになられた後、少し大きな諍いがありましたな。名持ちは討たれ、力なきモノは人の作り出す光に追いやられ、今は片隅に忍ぶ程度。完全に無となるのも時間の問題でございましょうなあ」

手を付けていなかったカップのコーヒーを飲みながら、ふうんと相槌を打つ。なんだか一大事件みたいな感じだけど、正直なところどうでもよかつたりする。

他人に対してさして興味がない。人間も、それ以外も。

そういえばこの魔女が私の事を姫と呼ぶのは、こちら側の連中を率いて導けるのは私だけだとか言い出したのが始まりだった気がする。そうすると、率いて導く相手がいなくなったのなら、この姫様呼びもなくなるのかな？ そんな役目は願ひ下げだけど、呼ばれるのに悪い気はしなかったから、ちよつと勿体ないかもしれない。